

八重山歴史研究會報

第 39 号

編集・発行 八重山歴史研究会
発行日 二〇〇六年一〇月二二日
事務局 得能(市史編集課) 581-1152
題字 玻名城泰雄氏

【二〇〇六年一〇月二二日発表要旨】

史料紹介

『南島風土記』石垣・島大濱間切大川村巡見統計誌について

明治前期の大川村をみる

崎山 直

はじめに

東恩納寛惇氏はその『南島風土記』のなかで大川村について「登野城と共にもと大浜間切に属し、石垣、新川と併せて四個の内である。石垣湾に臨み、古へ那覇、泊等より、土族の移住するもの多かつた」と述べ、さらに伊波普猷の「ヤドリ考」を引いて、「元来采邑を有しない那覇人は多く慶良間、宮古、八重山の如き離島に落ちて商業を始めたものが多いようである。大川辺にもこの種のお宿商人が少なくなかつた」と結んでいる。

大川は、現在石垣市の市街地をなす一字であつて、俗にい

う「四カ村」に属し、その南端の海岸沿いの一帯だけに数多くの商店が帯状に軒をつらねているという、同じ「四カ村」のうちでも特殊な地域として知られている。そこで、さきの『南島風土記』のいう歴史的背景が思い合わされるのであるが、恐らく明治以降この「お宿商人」はさらに増えつつづけてきたであろう。

ここにひとつの統計がある。最終年次を明治十八年度とする統計で、項目によつては明治十三年を起点とした『南島風土記』石垣島大濱間切大川村巡見統計誌(以下、単に『統計』という)がそれで、田代安定の編撰にかかわるものである。表紙に「復命第一書類 第二冊」とあり、私が見た限りでは、そのほかに「西表島仲間村巡見統計誌」と「宮良間切鳩間島巡見統計誌」(以上の資料はすべて複写)とがある。

田代安定といえは、既に知られているように三度にわたつて八重山を調査した人で、その最初が農商務省役人時代の明治十五年、ついで同十八年、そして三度目は東京帝大調査員として明治二十年に来島した。前二回の調査が主として政治

や経済、社会面からのそれであつたのに対し、三回目調査は歴史や民俗などの学術的な研究調査が主であつたという。なお、田代安定と八重山のかかりについては、三木健『八重山近代民衆史』(三一書房、一九八〇)にくわしい。

この『統計』は、明治十八年に調査したものらしく、いわゆる旧慣制度の弊を調査し、その改革を意図した主旨のもとに進められたものと見られ、従つて『統計』には、戸数、人口、職業、各戸主姓名、年齢、出産死亡、長寿者、多子免税、結婚者年齢、未婚者欠偶者、独身者、人別上納高、免税者、家畜数、田畑反別、地価、牧場、川、山、山林、地名、御嶽、物産、農作季節、輸出入品目等々、多岐にわたる内容がおさめられている。

調査の目的とする旧慣改革の意図が、田代の望んだ方向に進まなかつたにしても、われわれにとって、この『統計』は明治前期の大川村の一応の村落構造を示す資料となつており、とりわけ各戸主姓名が列記されているのも珍しく、およそ三代前のことであることから最も身近に当時を推測させてくれている。

察するに、同様の「復命書類」が他の村々についても残されているものと思われるが、今のところその所在は不明で、従つてここでは明治前期の大川村の概要を伝える一史料として、今後の研究の足がかりとして若干の考察を加えながら紹介したい。

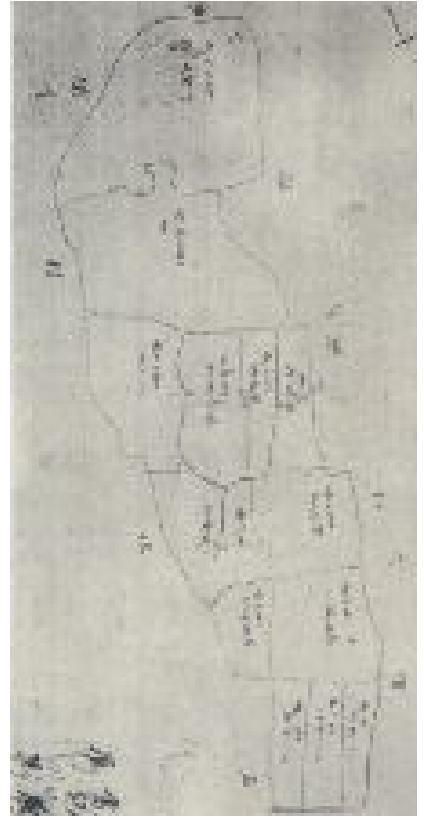
概況

明治前期大浜間切管内の大川村は、東に登野城、西に石垣の両村と境界を接し、南北に細長く、居住区以北は西方にややかたよりをみせている。

その居住区は四カ村に共通の、ほぼ整然とした道路によつて東西南北に仕切られており、東側から西へ順に「クシイマタ・パカ」(アンヌ・パカ)、「バンナー・パカ」(ナカヌ・パカ)、「インヌ・パカ」の三つの八カによつて仕切られていることは知られている。そのうち、西側の「インヌ・パカ」は、以前はさらに「フーガー・パカ」と「ブンナー・パカ」の二つに仕切られていたが、いわゆる「明和の天津波」後廢道となつて一パカになつたという(喜舎場永珣『八重山歴史』)。現在は、通称四号線(東西に走る主要幹線道路)以北にその形跡をうかがうことができる。

かつて住家のいきつく居住区の北端は抱護林(松林)があつた。そのいわゆる「マツヌクス」(松並木後方)からは畑地や原野が北へ広がっている。真地原、長間原の畑地をへて、やや段丘状の仲垣原、宇志原、ブン二原の台地につづき、やがて山嶽地帯に達する。

バンナ岳(二三〇・四メートル)を中核とする連山について『統計』は、村構山林として「バンナ、フハザン、マエバナ、タラマニ」などを記載している。また、マエバナに源を発する高原川がアラヒスキ浜へ貫流していることも記してい



るが、現在は流量は極めて少ないものの、一部改良のうえ新川川（二級河川）につながれている。

かつて上流付近の台地の高原川沿いに水田があった。用水をこの川から汲み上げて利用に供したことがあるが、現在は無い。

村の南面は海岸で、前浜といい、一帯は寄留商人が多く住んでいた。当時は、東西八十二間（約一四八メートル）、南北五間（約九メートル）の東西に細長い砂浜で、丸木舟や六反帆船がつながれていたという。

ほかに、神祠（御嶽）の記載もみえる。それによると、公儀御嶽として知られる美崎御嶽が登野城村内にあって、東西五十間（約九一メートル）、南北六十間（約一〇九メートル）の敷地を占め、トウカナズ、ヤラブ、トノウ木などの樹木が繁茂していたことが知られ、明治二十六年の絵図では、東の

天川御嶽とつながるほどの森林帯をなしていたことがうかがわれる。

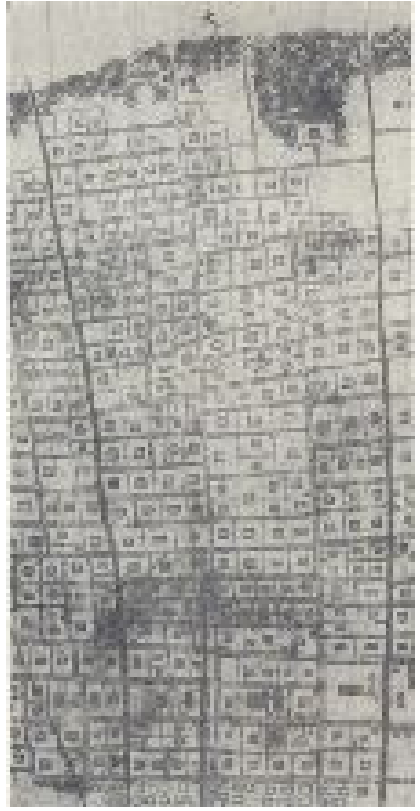
大石垣御嶽も、東西四十間（約七三メートル）南北四十四間（約八〇メートル）の広さを占め、その一部は抱護林帯につながっている。当時、美崎御嶽の祠堂（拜殿）が瓦葺きであったのに対し、大石垣御嶽のそれは茅葺きであった（明治三十五年、瓦葺きに改修）。

また、与那国往來の旅願いのための与那国御嶽が前浜近傍にあり、東西六間（約一一メートル）、南北八間（約一五メートル）の敷地をもち、ヤラブ木などが生えていた。しかし、拜殿はない。

これら三御嶽の敷地面積は合わせて十五町三反六歩としているが、このうち大石垣御嶽の広大な敷地が明治三十年代頃から二男、三男など分家に必要な家屋敷地として村民の願いによって払い下げられていることが他の史料によつてうかがわれる。

与那国御嶽は、「鷲の鳥ユンタ」の作者仲間サカイが初代司となつたとして知られる御嶽で、塩谷商店敷地にあつた。

与那国御嶽一帯はもとより、登野城の天川御嶽から新川の長崎御嶽に至る東西海岸沿いはヤラブ、ガジユマル、アコウなどの巨木が生い繁る一大深山であつたというが、明治三十年代以降つぎつぎと伐採されて見る影もなくなっている。（喜舎場永珣『八重山民謡誌』参照）。事実、『統計』では、三



尺廻り以上の赤木三百本、松木二百本、ガスマル木百本、福木五百本等々の記載がみえることから、村内でも比較的大きな樹木が生えていたことがうかがえる。

戸数と人口

明治十八年当時の大川村の戸数や人口数をみると別表(1)のとおりである。寄留者が戸口ともに全体の約二割を占めていることから、早くも寄留者がこの地域に居住していたことがわかる。

しかし、表から推測できるように、寄留者の家族構成は一戸当り約一・一人で、本籍者のそれが五・二人であったのにくらべ、著しい対象を示している。ということは、寄留者は当時そのほとんどが単身者によつて占められていたことを示すもので、東恩納寛惇のいう、いわゆる“お宿商人”や、その配下の雇人たちであったであろう。

(表1) 明治18年大川村戸数人口数 (計数に若干の違ひあり)

計	寄留	本籍	科目	
			族籍	族籍
人 一、〇七〇	人 五二	人 一、〇一八	土族	土族
二六五	一九	二四六	平民	平民
一、三三五	七一	一、二六四	計	計
戸 二四八	戸 六三	戸 一八五	土族	土族
五八	〇	五八	平民	平民
三〇六	六三	二四三	計	計

四、八一人のうち、四カ村土族を四、三二八人とした『一木書記官取調書』の数字によつても肯定されよう。

この土族層の氏姓についてみると、本籍戸数二四三戸のうち、著名な一門を中心に幅広く分布している。長栄氏、梅公氏、毛裔氏、松茂氏、錦芳氏、嘉善氏、山陽氏、憲章氏等々、以下別表(2)にみるとおりであるが、なかでも長栄氏がきわ立つている。

この姓氏一覧には、それぞれの番地を記さなかったが、少し留意してみると、同一門の家がほぼ隣接していることが知

戸数のなかで族籍別についてみると、土族が圧倒的に多く、全体の約八割を占めている。四カ村には土族層が多く居住していたことは広く知られているが、明治二十六年調査の土族総数

(表2) 大川村姓氏一覽

伯言氏	益茂氏	文桂氏	上官氏	憲章氏	山陽氏	嘉善氏	錦芳氏	松茂氏	毛裔氏	梅公氏	長栄氏	姓氏
五	五	六	六	七	八	一〇	一〇	一一	一二	一三	四六	戸数
守恒氏	橙梯氏	青栢氏	蔡林氏	徳容氏	公治氏	順天氏	向長氏	孟功氏	文林氏	大史氏	成功氏	姓氏
—	—	二	二	三	三	三	三	四	四	四	五	戸数
伯仁氏	雍長氏	永茂氏	岳昌氏	毛孫氏	東明氏	馬氏	□良氏	浩善氏	豊有氏	易廣氏	長興氏	姓氏
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	戸数

られる。例えば、さきの長栄氏は三九番地、同番地、四〇番地、四一番地、四四番地、同番地、四六番地、四七番地、四九番地、五〇番地というように目立っているが、ほかに松茂氏、文桂氏、憲章氏、錦芳氏などが二、三戸ずつ隣接してい

たようすがうかがわれる。子細にみていけば、いわゆる同族集団の分布状態が社会学上からも分析できそうである。

『統計』にはまた、村の本籍人口総数一、二六四人の年齢別による内わけを記してある。ここでは表示しなかつたが、村を經營する住民の年齢分布からみた実勢がほぼ推測されよう。

例えば、一五歳以上五〇歳までの住民が「正人」として上中、下、下々の四級に区分され貢租負担を義務づけられたことは知られているとおりであるが、大川村について試算してみると、およそ六百余人で、全体の四九〇パーセントを占めていたことがわかる。

しかし、与人、目差、筆者、女頭といった役職者や多子者は免税となつていたので、貢租負担者の実数は少なくなる。『統計』による「免税人表」では七二人という数字が見え、「細布免税人表」でも一九人が免税者となつている。結局、『統計』のかかげる「明治十八年度上納表」に見る五四六人が正男女の実数ということになる。

職別

当時の村役は、世持二、村佐事一、村筑一、田ブサ二、山ブサ一、野ブサ二、馬ブサ二、札持頭二、猪垣当二、牧場番一、女取締二、女四、布晒人二、女二、藍遣人二、女？人であった。ほかに、大工一、医者四、師員六、そして農業を男九二人、女一一八人としている。

村番所（現在の市場にあつたとされる）で、与人、目差、筆者のもとで農民を代表したり、あるいは貢納や耕作方に直接に關与した。「沖繩旧慣租税制度」によれば、かれらは農民から選任される任期一年の第四階級に属した。

耕地

『統計』には、畑地を六十七町五反余、田地を三十四町三反余と記し、それぞれ上納作地が含まれている。七年後の明治二十五年調査では畑地の規模がほぼ同様であるのに対し、田地の場合は五十八町九反余とある（「沖繩県八重山嶋統計一覽表」『八重山文化』第3号所収）。これらの数字に大きな誤りがないとすれば、わずかの間に二十四町余の新田開發が進められたらしく、米需要が急速に増えつづけていったであらうことが推測される。

村の水田は、前田原、ヒノツ田原（ピニズ）ヲラタハル田原（ウラタ原）、名蔵田原（ノーラ田）、末良田地（シーラ田）など名蔵近傍にある。このあたりは砂質壤土で概して水田の多いところとして知られる。ほかにアラダ田原、底原田原、竿祢田原などが宮良村北方の山際にあつた。

畑地の場合は諸作中心で（四十一町九反）、民用作地五十七町余の七四パーセントを占める。そのほかに雑穀、棉、煙草などが作られた。

例えば、真地、長間など村内から近い畑地には、芋が三三三コージ、粟三三三コージ、雑穀三九コージが作られている。

一コージは約一、一一一坪という。見渡す限り芋畑が広がっていたであろう。因みにこの一帯の作地は四カ村の主要耕作地で、砂質土や粘質土からなる。地力も比較的高い方だといわれている。

農作物のおもなものをみると、米、麦、粟などの五穀のほか、諸類、南瓜、冬瓜、大根、牛蒡のほか野菜といった普通作物のほか、煙草、草棉、山藍、蓼藍、菜種子、苧麻などの特有作物があげられている。

また、飢餓対策上のいわゆる救荒食品が列記されていることは注目をひく。例えば、ソテツ、ニカナ、サクナ、ハタケアサ、アタン嫩芽等々十三品目をあげている。

家畜

『統計』には、また、村の家畜飼養数も記録されている。

牛〃一六一頭、馬〃七四頭、豚〃二四六頭、羊〃四二頭、鶏〃四八六羽、犬〃一〇六頭とある。

村の本籍戸数二四三戸と対比しながらみていくと、例えば牛の場合、一戸当り約〇・七頭、馬約〇・三頭である。総体的に八重山では時代を経るにつれて家畜飼養数も漸増したとみえ、明治二十五年調査（前掲）では、大川村でも牛〃三六七頭、馬〃二九六頭、豚〃三六七頭となっており、当時の戸数二七二戸と対比すれば、牛の場合、一戸当り約一・三頭となつて倍に近い。馬も〇・九頭となつて約三倍に近い増え方を示している。他の家畜もほぼ同様である。

大川村の事例だけで全体をみるわけにはいかないが、明治以降、牛馬家畜数に増加の見えることは、例えば明治十年代以降の鉄製犁の利用、同二十四年以降の改良大型鋤利用による馬耕の普及等も考え合わされるだろう。水田には、ほかに牛力による地力維持増進のための、いわゆる田踏みがさかに行われもした。

仲吉朝助氏は、八重山全島の家畜を調査した結果、「八重山島民八殆ト家畜ヲ以テ唯一ノ財産トナセルヲ以テ従テ其数ノ多キ八県下第一位ヲ占メタリ」と述べられたことがある（八重山島農業論）。

なお、『統計』には牧場としての名蔵東方の「裏本牧」（ウラント）東西三五〇間〓六三〇メートル、南北二百間〓三百六〇メートルの名がみえるのみであるが、ほかに仲垣原一帯も放牧地として利用されたらしく、現在もその傾向をみせている。

貢納

『統計』には、明治十三年度から十八年度までの「上納人割前表」や「上納表」をのせている。各年度ごとの一人前貢納高を男女別、士族、平民別に記しているほか、上納高や上納品目をも記載されているので、今後の研究に役立つ資料となるろう。

例えば、年貢米だけに絞れば、大川村は一〇七石を前後し、従って正男女一人前の負担高も族籍の別なく大きな差異は認

められないものの、平民のみに背負わされたとみられる所遣米については年度によつて大きな差がある。所遣米とは、王府（県）への粗米ではなく、蔵元や所の役人の使用に供された必要経費である。明治十五年の事例では、所遣米計九石一斗余（一人前負担二斗九升余）であつたのに対し、同十八年のそれは、計四〇石四斗余（一人前負担七斗一升余）となつている。人員に大きな差はない。これらことから、島内外における要因を考えていくことも興味が増加しよう。これだけでなく、いわゆる人頭税の再吟味にも役立つ。

むすびにかえて

以上、紙幅の都合もあつて意を尽くさぬ紹介となつたが、『統計』にはこのほか、村の移出入品目もあつて、社会・経済の動向をうかがわせてくれる。品目をべつすると、その代価をはじめとして、生産物、生活用品などが推測され、なかには今ではあまり聞かれない言葉もでてくる。例えば、「シユンカン」（碗の一種）、シユンカン・マカリともいう、「アソビン」（水差の一種）、「ワカシ」（バガシ・一種の容器）などがそれである。

それはともかく、村々の研究はむしろこれからの課題であるろう。この意味で村にそくした具体的な諸史料の発掘と研究の掘り下げが待ちのぞまれているのではなからうか。

『石垣市史のひろば』第五号、石垣市役所市史編集室発行、昭和五十八年より転載（一部修正）

【二〇〇六年一〇月二二日発表要旨】
研究紹介

八重山先史文化の源流について

高宮廣衛の図を用いて

島袋 綾野

はじめに

宮古・八重山諸島を含む先島諸島の先史文化の源流がどこにあるのか、考古学を学ぶ者もそうでない者も、それに対する興味はあるだろう。特に、今から約三五〇〇年～四〇〇〇年前も前に下田原式土器を作った人びと（現在のところ、八重山諸島で見付かる一番古い文化の人びと）は、どこから来たのか。今もって謎のヴェールに包まれたこの問題に対する関心も高い。八重山諸島を中心に地図を見渡せば、近くには台湾があり、さらに西側には中国の温州・福州や廈門など沖縄に古くから関わりのある地域が大陸の東海岸にある。さらに言えば、石垣島を中心として沖縄本島までの約四〇〇キロを半径とした場合、台湾の台湾、中国の南東部、タバン諸島やバブヤン諸島までもが、その半径に入るといっぴじょうに特異な地域であると言える。もちろん、南の玄関口波照間島や、西の玄関口与那国島を中心とすれば、もっと範囲は広がるのである。

早くは鳥居龍蔵によって、八重山の文化は台湾以南の地域

に源流があるとされた。しかし、彼がその根拠とした外耳土器は、現在では新里村西遺跡の調査により、北から入ってきた滑石製石鍋から変化したものだと考えられている。新しい発掘データによって、鳥居の主張の根拠は崩れてしまったものの、それでも、早い時期から八重山諸島の文化源流を沖縄本島以北とは異なるものと捉えたことには感服する。

ここに、高宮廣衛が作成した「南島における先史文化圏と文化の源流」という図がある。特に八重山諸島の先史土器下田原式土器の源流を示したものである。この図を用いて、八重山諸島の先史文化の源流に関する、現在の研究成果についてまとめたいと思う。なお、『八重山歴史研究会会報』第三三号では、先史時代無土器期を対象に、編年研究の現状などを紹介した。今回は、それよりも古い下田原期を中心として紹介するが、八重山先史時代の研究という点で、若干、リンクする部分があることをご了承願いたい。

南島における先史文化圏と
文化の源流

この図には三つの説が組み込まれている。それぞれを紹介する。

A・國分直一説



下田原貝塚出土の下田原式土器



南島における先史文化圏と文化の源流
 高宮廣衛 2001 『南島考古雑録()』 『沖縄国際大学総合
 学術研究紀要』 第5巻第1号 より

焼成器形から見て酷似する土器は、巨石文化の中に登場する土器に見出される。(中略)ある時期に八重山の先土器文化人が台湾東海岸の巨石文化の土器焼成技術を学んだものと見うる慨然性は強いように思われる」と述べ、台湾東海岸の土器文化の影響が八重山諸島に及んだと考えている。また、台湾の西海岸については、華南地域の文化的な影響によって、やや複雑な展開を見せているため、東海岸とは異なるという指摘をしている(「八重山の先史文化層 堆積の層序関係から見た」、『北の道 南の道 日本文化と海上の道』第一書房、一九九二年)。

B・大瀨永巨説

大瀨永巨は台湾南部東海岸の卑南遺跡や西海岸の鳳鼻頭遺跡で、把手のつく土器があることから、総括して台湾南部經由説を考えている(「八重山における原始古代文化の諸問題(試論)」喜舎場一隆編『南島地域史研究』第一輯、文献出版、一九八四年ほか)。大瀨はこの説を肯定する要素と

國分直一は著書『南島先史時代の研究』(慶友社、一九七二年)の中で、波照間島下田原貝塚から出土した土器について、「(南西諸島の)南部諸島の土器は台湾東海岸の巨石文化地方の土器に近似しており、中部諸島の土器は縄文後期系の焼成技法を持つものであることが考えられる。下田原式に

して、高山純や新田重清、國分直一、リチャード・ピアソンの示した、鳳鼻頭遺跡が包括される龍山文化の流れを汲む台湾の文化と、八重山先史文化との共通性を述べている。

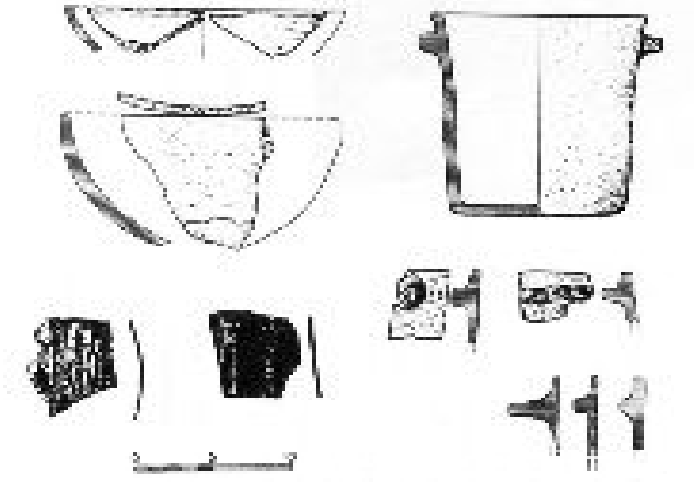
しかし、高宮廣衛はこれらの説には慎重な態度を取っている。台湾で行われた講演会要旨「八重山地方の先史文化と台湾」(『沖縄の先史遺跡と文化』第一書房、一九九四年に転載・加筆)で、「この文化は國分先生のお説のように台湾東海岸を北上したのかもしれない。地理的位置からしますと、國分説は大変考えやすいように思われます。ただ、

現在のところ私人は台湾の資料に関しては卑南遺跡の一部しか見ておりませんので、この問題に深く突っ込んだ発言はできかねます。私のきわめてせまい貧弱な知識の範囲で申しますと、卑南遺跡の土器とわが八重山の下田原式土器とは器種・器形とも大分異なり、現時点ではストレートに結びつきません。

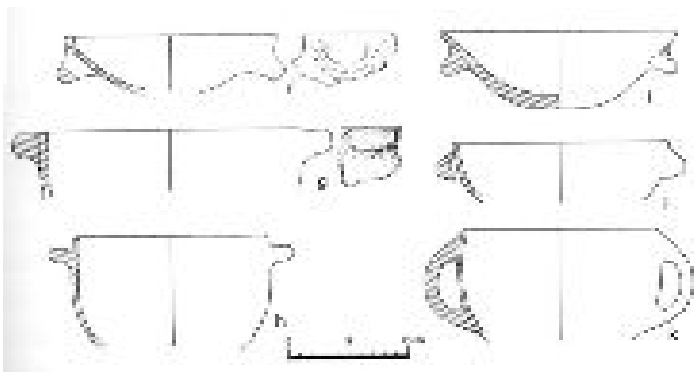
(中略)現時点で申しますと、両者は類似点よりも相違の方が大きいのです。」と述べている。もちろん、大瀨は高宮の慎重な態度も考慮した上で、台湾南部經由説を考えているのであるが、鳳鼻頭遺跡の遺物を実見したことがないが、卑南遺跡の資料を見る限り、類似点は極めて少なく、高宮の態度に便乗せざるを得ない。

C・金子えりか説

金子えりかは、「巨石遺跡 先島の例」(『海洋文化論』環中国海の民俗と文化1、凱風社、一九九三年)の中で、「例えば石器の局部磨製技術は台湾西海岸中北部の大安溪の中流地区に見出されるが、その地域の供出土器は泥質の黝黒色土器である。その他の地域では、西海岸でも東海岸でも、局部磨製石器の製造は行われていない。また貝斧の使用例は発見されていない。これらの事実は、台湾を避けた流通経路があったことを示唆するように見える。したがって、台湾以外に



大瀨永巨が紹介した鳳鼻頭遺跡の土器



卑南遺跡出土の外耳のついた土器

宋文薫・連昭美 2004 『卑南考古発掘1980~1982』
台湾大学出版会

も目を向ける必要が当然ある」と述べている。高宮が台湾非經由説とした考え方である。

現在、台湾大学で研究をしている陳有貝もまた、現時点で台湾經由を肯定してはいない（「生業の始点で捉えた台湾と先島諸島との先史文化関係」『南島考古』第二三号、沖縄考古学会、二〇〇四年）。陳の考えは、これまで遺物論で述べてきた三氏に対して、生業という始点を加えていることで、興味深い。つまり、

八重山諸島で下田原式土器が隆盛した時期、台湾ではすでに農耕社会に入っており、コメの生産も行われていた。いわゆる定住生活に入っていたのである。さらに、出土する遺物から台湾では外海の漁撈が少なく、舟の技術が発達していなかったと見ている。また、いわゆる舟を扱える人びとの存在については、専門漁民がいないと結論付け、「農業こそ当時の生業活動の重心であり、海洋資源はあくまでも付帯的な価値を持つもので、絶対的な必要産業ではなかった」とまとめている。

個人的見解 まとめにかえて

八重山諸島の先史土器文化が、沖縄本

島以北とは異なるという指摘は、鳥居龍蔵が述べたときから、一〇〇年余もかわらない。しかし、三つの説を紹介したように、いずれの説も資料が少ない現段階では決定打に欠けると言えよう。

陳は先述の論文の中で、比較のための事例として台湾の南東に位置する蘭嶼の問題を紹介している（位置関係は「台湾



台湾の主な先史遺跡分布図
大瀨永亘 1999『八重山の考古学』 先島文化研究所

の主な先史遺跡分布図」参照)。蘭嶼の遺跡調査資料によれば、出土遺物として土器・石器・鉄器・金銀器・貝器があり、土器と石器が割合豊富であるが、土器片が小さく、器形の分かる資料は少ないという。八重山諸島の先史時代下田原期においては、未だ鉄器の出土例はない。陳は、豊富な石器資料から、「石器については、瑛や片刃石斧など少数の遺物は台湾でよく見られるが、生業形態に最も関係ある打製石斧は独特で、数量が多いだけでなく外形は分銅形をしており、この種の石器は台湾東海岸の主要な石器の形態と明らかに異なっている。この現象は先史時代の台湾住民が明らかに蘭嶼に移住していないことを物語っており、いったいその原因は何であろうか？」と疑問を投げかけた。

現状では、地理的に近いからと言って、台湾と直接繋がるということは断言できない。しかし、経由説、非経由説を考えた場合、やはり、陳の指摘にあるように、台湾周辺にも異なる文化が存在するということは、たいへん重要である。

八重山諸島の先史文化では、稲作の痕跡は発見されていない。これは、単純に、炭化米や水田の跡が見付からないというだけではなく、プラント・オパールという顕微鏡レベルでの観察でも確認されていないので、陳の生業が異なっているという指摘は、受け止めなければならぬ。しかし、蘭嶼のような事例があるということは、台湾沿岸部や中国沿岸部といった地域に存在する、いわゆる海洋民の存在は気になると

ころである。しながら、現在のところ、そういった“移動性が考えられる民族”の痕跡は、台湾のみならず、中国の沿岸部でも調査例は少ない。近年、台湾

では陳有貝など、中国大陸では琉球大学法文学部の後藤雅利や、香港の考古学者によって移動が考えられる沿岸部の遺跡の調査が進められてきている。こういった調査例が増えることで、おそらく、今まで確認されていた台湾本土や中国大陸とは異なる先史文化の痕跡が発見される可能性は高い。

沖縄本島以北では九州の縄文時代や弥生時代の土器が出土し、なんらかの形で北からの文化の影響を受けていることが近年の研究で分かってきている。しかしながら、八重山諸島の先史文化源流については、下田原期、無土器期両時期を通して未だ謎が多い。現時点では、どこから入ってきたかは分からない、としか言えないが、ただひとつ、沖縄本島以北と異なるという点にはつきりしている。西か東か南かのどこの地域と繋がるのか、繋がらないのか、興味はつきない。



下田原式土器とほぼ同時期の沖縄本島の土器（教堂式土器）
時期的には縄文後期にあたる